

情報社会に必要な新しいリテラシー

—「メディアとのつきあい方学習」の提案—

堀田 龍也^{*1}

＜概要＞ 情報教育をパソコン操作を教える教育と勘違いしている学校や教員もまだまだ多い。このような状況の中、情報教育を「情報社会に必要な新しいリテラシーを育てる教育」と今一度捉え直し、「メディアとのつきあい方学習」として再提案したい。

＜キーワード＞ メディアとのつきあい方学習、情報教育、情報社会に必要なリテラシー

1. 情報社会で求められる学力とは

学校で行われている情報教育は、パソコンの操作を教えることにとどまっている場合がある。パソコンの操作を教えることで、情報社会における学力が保障できるのだろうか。

このことを考えるには、情報社会の特質と、これまでの社会との違いをしっかりと押さえておく必要がある。

インターネットでこれだけ情報が取り出せる現在、たくさんのことを知っていることよりも、むしろ必要に応じて調べることができる力の方が重要である。最低限の知識や理解は必要だとしても、道具を使って調べられることを重視すべきである。かつては「たくさん知っていること」がもてはやされたが、今や情報が溢れており、すべてを覚えるということはナンセンスである。ならばむしろ、「上手に見つける」能力の方が重視されるというのは、当を得た話である。そして、情報社会においては、飛び交う情報の多くはメディア経由でやってくるため、メディアを使えることは最低限の能力保障となる。

それではなぜ私たちは情報を探すのだろうか。なぜ、1人の人間では把握しきれないほどの情報の中から、必要なものを見つけ出さなければならないのだろうか。

それは、よりよく問題を解決するためである。問題を解決するには判断が必要であり、より正しい判断をするためには、一定の情報量が必要である。同様のケースはないか、その時ほかの人はどう判断したか、その結果はどうだったのか、今の時代はそれと同じ決断でよいのか。これらの情報を得ずに判断を下してしまっただけは、いわばミスジャッジとなる可能性もある。それが自分だけの問題ではなく、会社等の組織にお

ける重要な意思決定ならばなおさら情報が必要となる。メディア経由で流通する情報を見抜く目は、情報社会の求める学力の1つであると考えることができる。

今の時代、たくさんの情報がメディア経由で流通している。では、なぜこんなにもたくさんの情報が流通しているのだろうか。それは、情報を発信している人や組織がたくさんいるからである。なぜ情報を発信しているのかといえ、それは情報を伝えるためだ。相手に情報を伝える。しかも、溢れるほどの情報の中で、自分たちのメッセージを的確に伝える。そのための能力が必要となっているのである。

情報を収集し、見抜き、正確に判断し、そして相手に伝えるために整理し、メッセージがきちんと届くように伝える。この一連の力が、情報社会の学力の根幹であるというのが筆者の考え方である。

2. 「メディアとのつきあい方学習」の提案

情報社会に必要な新しいリテラシーを育成するための学習として、「メディアとのつきあい方学習」を提案したい。

(1) メディアの特性と適切なメディアの選択の仕方について学ぶこと

「メディアとのつきあい方学習」において、まず大切なのは、メディアの特性を知り、目的に応じてメディアを選ぶことができるようになることである。

メディアにはそれぞれ特性がある。たとえば新聞には新聞の特性がある。新聞の目的は雑誌とは異なっており、その結果、違う表現形態をとっている。情報を発信するメディアとしてのFAXには、リアルタイムで相手に紙面ベースで

^{*1} HORITA, Tatsuya : 静岡大学情報学部 e-mail=horita@horitan.net

情報を流すことができることにあり、同じリアルタイム性を持っている電話とは特性が異なる。また、手紙とはスピードが異なる。電子メールと電子掲示板は、同じように電子的にメッセージを綴っていくが、読者の範囲が異なるという特性の違いがある。

注意しなければならないのは、同じメディアの中で特性が異なる場合があるということである。テレビのニュースは映像と音声で私たちに即時性の高い事実情報を届けてくれる。一方、同じテレビでもドラマはあくまで虚構だ。事実だと思っている人はいないだろう。電子メールとメーリングリストでは、送信・受信の方法にはほとんど違いがないが、その使われ方とマネーは異なっている。

受信ばかりでなく、子どもたちが情報を発信する際にもメディアを使う。どんな時には電子メールが便利なのか、その理由をしっかりと知った上で使いこなす人になって欲しい。

生活の中でメディアを使い分けるためには、メディアの特性に関する一定の知識が必要である。

(2)メディアが生活に与える影響について学ぶこと

「メディアとのつきあい方学習」の次の柱は、メディアは私たちの生活や社会に影響を与えていることを自覚することである。

私たちは毎日、メディアからたくさんの情報を得ている。メディア経由で情報が降り注いでくる。たとえばテレビは、真剣に見る番組ではない時でも、何となく電源が入っている。そこから流れてくるコマーシャルで、私たちは新製品の情報を得る。買い物に行ったときに「これを買おうかな」と手に取る背後には、コマーシャルの好感度が少なからずあるだろう。

私たちが北朝鮮に対して持っているイメージは、間違いなくメディア経由でもたらされたものだろう。なぜならほとんどの人が、実際に北朝鮮を訪問したことなどないからである。テレビ、新聞等を通じて、私たちは北朝鮮を知ることになる。しかし、テレビで語られることや新聞に掲載されることは、記者が知り得た情報をもとに、その重要度を判断、整理して、必要な部分だけに編集した結果である。おそらくそれは事実ではあるが、事実のすべてではない。

メディアが私たちの考え方をいつの間にか規定していること。特にマスメディアは、私たちに優れた情報を与えてくれる半面、所詮は誰

かが構成した結果の情報に過ぎないことを自覚すること。このようなメディアの及ぼしている影響を理解した上で、私たちは「自分の」意思で物ごとを判断していかなければならないということを強く認識すること。これらをしっかりと教えなければならない。

(3)メディアが取り巻く社会での安全な行動の仕方について学ぶこと

「メディアとのつきあい方学習」の最後のポイントは、メディア社会でくらしていく私たちが安全で安心な生活のために知っておかなければならない知識や、備えておかなければならない態度である。

ネットワーク犯罪のように、社会で話題になる大きな犯罪だけを相手にしているわけではない。情報社会で生きていく上で普通に遭遇する、さまざまな問題について知り、自分の身を守る術を身につけておくということである。

たとえばインターネット上のウィルス対策。ウィルスの種類に関する細かい知識よりも、自分のパソコンがウィルスにかからないようにするにはどうすればいいか、かかったときにはどうすればいいかということを知っておくことが大切である。また、自分のパソコンがウィルスに感染したということは、単に自分だけの問題ではなく、自分がこれまで電子メールを送ったすべての人を同じようにウィルスに感染させる可能性があるということを認識していくことも大切である。

まったくインターネットを使ったことがない人には、このことの重要性はわからない。また、単にインターネットを使ったことがあるだけでは、たとえばなぜメーリングリストに大きな添付ファイルをつけることはなぜ問題なのかというようなことはわからない。したがって、一定の知識が備わって初めて理解できることもここに含まれており、経験の中で学びつつも、情報社会に関する一定の知識を与える教育も必要ということになる。

情報社会を健全にするための市民意識と、そのような意識を持つために必要な知識。さらには、モラルや姿勢なども、この項目の守備範囲である。

[参考文献]

堀田龍也 (2004), メディアとのつきあい方学習, ジャストシステム